

あるモンゴル人化身ラマの生涯

—シリングル盟ベイスイン・スム・ジャンルン・パンディタ2世の事績から—

ウニルサイハン

滋賀県立大学大学院 人間文化学研究所 博士前期課程

1. はじめに
2. チベット仏教の「化身ラマ」制度
3. モンゴル社会における「化身ラマ」制度の形成
4. ジャンルン・パンディタの系統
5. ジャンルン・パンディタ2世の生涯
6. おわりに

1. はじめに

チベット仏教がモンゴルの上層階級に伝播し始めたのは13世紀である。16世紀末になると、チベット仏教のゲルク派はモンゴル高原の全域で隆盛を極めた。一方、モンゴルの軍事的な支持を得ることによって、チベットではゲルク派の覇権が確立した。しかし清朝統治の拡大により、チベットとモンゴルの関係にも清朝皇帝の力が及んできた。

清朝前期(1644-1735)、皇帝たちはモンゴル人に対する権威を確立するために、また、元朝の統治を引き継ぐ意味合いで、チベット仏教を国教として位置づけていた^①。清朝中期(1736-1850)、乾隆帝は、ジュンガル帝国の滅亡によりチベット仏教に対する最大の施主になった。清朝は、最初期からモンゴル統治の方策の一つとしてチベット仏教を積極的に利用した。

清朝は、ドロノール会盟により、ハルハ・モンゴルの最高位の大ラマであるジェブツンダンバ・ホトクトを自分の権威のもとに引き入れ、またそれに対抗できる勢力として、内モンゴルにおいてチャンキャ・ホトクトの系統を成立させた。チャンキャ・ホトクトの台頭によって、ハルハ・モンゴルと内モンゴルにおいて二人の高位ラマ僧が対立する構図が作られ、その影響は、20世紀初頭におけるモンゴル人の民族独立運動にまで及んだ(Bulag 2010: 70)。

同じゲルク派の僧侶であるが、チャンキャ・ホトクトの存在は、モンゴルにおけるダライ・ラマの影響力を防ぐという意義を持っていた。本来モンゴルにおいては、ダライ・ラマ政権から派遣された高僧たちが宗教に対して絶対的な権威を持っていたが、清朝皇帝の代理人としてのチャンキャ・ホトクトの

出現に従って、新しく建てられたドロノールの寺院と五台山がモンゴル仏教の中心地となった。

モンゴル地域におけるチベット仏教の発展状況について論じる際、今までの研究では清朝皇帝と、チベット仏教のトップとみなされる数人の高位ラマ僧たちの関係が注目されてきたが、本稿では、清朝皇帝、モンゴル、チベットという三項関係の中で、モンゴルの地方権力者(盟、旗のレベル)とラマ僧たちは如何なる関係を取り結んでいたかについて、シリングル盟、ベイスイン・スム・ジャンルン・パンディタ2世の事例により明らかにしたい。

ベイスイン・スム(貝子廟)^②は、シリングル盟アバハナル左旗(今のシリン浩特市)の旗寺(ホション・スム)で、内モンゴルの北東部、エルデニ・オボ^③という壮大な13オボを背にして、シリングル河の東岸に建つ。

4代ジャサク・ベイス・パレジュルドルジェ王(dpal 'byor rdo rje)と東チベット・アムド地方からきたラマ僧であるパレジュルルンドブ(dpal 'byor lhun grub)が1723年から建立を始め、1743年ツォクチェン・ドガン(本堂)が建てられた。その後、高僧はダライ・ラマ7世から「ジャンルン・パンディタ」の称号を与えられた。そのため、寺院の正式な名称は、「アリア・ジャンルン・パンディタ・ゲゲン・ヒードゥ」^④になったという。また、「ゲゲン・ソム」、「パンディタ・ゲゲン・ヒードゥ」などとも呼ばれる。

ベイスイン・スムは「学問寺」として有名であったため、嘉慶年間(1796-1820)に、ラマ僧の数が1500人余りになり最盛期を迎えていたという。また、長尾雅人の1943年の調査によると、僧数は868名とされ、これだけの数を擁する大廟は、内モンゴルにおいて有数なものであったという。その中379名が旗内の子弟であって、その他は旗外から修行のためにきた者であり、中にはハルハ或はダリガンガ等より来る者もあったとされる(長尾1992: 100)。

1947年内モンゴル自治区が成立した際は、ラマ僧の数は600余りであったが、1957年に8世化身

ラマが即位した時ラマ僧の数は再び増加して、800名を超えたという。しかし、中華人民共和国建国後、1958年からの宗教改革、文化大革命などにより、ラマ僧たちは酷い弾圧を受けた。改革開放後の1983年には、ベイスイン・スムに在籍しているラマ僧は87人になってしまい、その中の45人が他の旗からきた僧侶であったという。2005年の統計によると、ラマ僧の数は32人で(Ürnigüüd 2011)、2019年7月の筆者の調査時には、在籍するラマ僧は26人に過ぎなかった。最も高齢な者は91歳であった。

かつてベイスイン・スムでは8人の化身ラマ(ゲゲン)が認定されてきた^⑤。最初と最後の化身ラマがチベット人である以外、他はモンゴル人であった。中でも、ジャンルン・バンディタ2世は学問の幅が広く、優れた学者として評価されてきた。本稿では、彼の弟子であるロサンチンライナムギャが19世紀初頭に著した「rje btsun dpal ldan bla ma dam pa lchang lung arya padi ta rin po che ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa mkhas pa'i yid 'phrog nor bu'i do shal zhes bya ba bzugs so」というチベット語のナムタル^⑥に基づいて、ジャンルン・バンディタ2世の生涯について概観する。

2. チベット仏教の「化身ラマ」制度

チベット・モンゴル仏教の最も顕著な特徴の一つは、すぐれた高僧は涅槃に入らず、衆生を救うため、この世に何度も生まれ変わるという「化身ラマ」制度を持っている点である。これは元来、インドから伝来してきた概念であるが、制度として洗練されたのはチベットにおいては13世紀以降、モンゴルにおいては16世紀以降である。チベットでは、彼らはトゥルク(sprul sku)と呼ばれ、モンゴルでは、ホトクト、ゲゲン、ホビルガーンなどと呼ばれることが多い。

この制度は、チベットにおいては、カルマ・カギユ派のカルマ・バクシ(karma baksi: 1204/6-1283)^⑦から始まる^⑧。カルマ・バクシがモンゴル帝国の第4代皇帝であるモンケ・ハーン(在位1252-1259年)から黒色の帽子を授与され、冊封を受けたことで、「シャナクパ」(zhwa nag pa: 黒色の帽子)と呼ばれる系統が確立した。

この頃から、宗教的権威は一族内の継承から輪廻

転生によるものによって代わるようになり、しだいに他の宗派も転生ラマ制度を導入するようになった。16世紀、カルマ派の圧迫を受けていたゲルク派も転生ラマ制度を取り入れた。

ゲルク派において最も重要な転生系統はダライ・ラマの系統である。1578年に、南モンゴルのトゥメト部のアルタン・ハーンはゲルク派の高僧ソナムギヤムツォ(bsod nams rgya mtsho: 1543-1588)を青海に招聘し、「ダライ・ラマ」の称号を贈り、一方、ソナムギヤムツォはアルタン・ハーンに「チャクラヴァルティ・セチェン・ハーン」の称号を贈った^⑨。

その後、ダライ・ラマ3世がモンゴルの地で遷化した後、次の化身者としてモンゴルのアルタン・ハーンの曾孫ヨンテンギャツォ(yon tan rgya mtsho: 1589-1616)が認定された^⑩。彼が認定されたことによって、モンゴルの幾つかの部族がゲルク派と中央チベットの支配をめぐる巨大な権力闘争に引き込まれたという。

そして、1642年にモンゴルホシュド部・ゲーシ・ハーンは大軍を率いてチベットに入り、ゲルク派最後の敵であったツァンパ政権を消滅させたため、ダライ・ラマ5世を頂点とするダライ・ラマ政権(ガンデン・ポタン)が誕生した^⑪。

こうして、ゲルク派の転生ラマ制度は、最初はモンゴルの軍事的支援を得て築かれたが、のちに清朝皇帝の統制を受けた。特に、乾隆時代末期において、「金瓶掣籤」(金瓶くじ引き制度)の導入などにより、清朝皇帝はチベット仏教の高位化身ラマの認定過程を統制した。清朝皇帝による化身ラマ制度に対する影響については、先行研究でさまざまな角度、立場から研究がなされてきているので、ここでは控える。

3. モンゴル社会における「化身ラマ」制度の形成

ダライ・ラマ3世がモンゴルの地で遷化した後、次の転生者としてモンゴルのアルタン・ハーンの曾孫ヨンテンギャツォが認定された。これはモンゴルの歴史における初めての化身ラマであり、また唯一のチベット人ではないダライ・ラマとなった。

その後、ハルハ・モンゴルのアバタイ・ハーンの孫であるトゥシェート・ハーン・ゴンボドルジの息子ザナバザル(1635-1723)が、1639年にチョナン派の学者ターラナータの転生者・ジェブツンタンバ・

ホトクト (rje btsun dam pa qutugtu) として認定された^⑩。それ以降、ハルハ・モンゴルにおいても「化身ラマ」制度が確立した。

一方、内モンゴルでも最高位のチャンキヤ・ホトクトの系統が成立した。モンゴル人の化身ラマとして始まった系統の名については、1世のタグバオツセル (grags pa 'od zer)^⑪が「チャン」という村の子であったため、彼の化身はチャンキヤと呼ばれることになったという。チャンキヤ・ホトクト2世 (ngag dbang blo bzang chos ldan: 1642-1714) は清朝の康熙帝に重視され、活躍した化身ラマの代表ともいえる。康熙帝はドロンノールで彙宗寺を建立した後、チャンキヤ・ホトクト2世を扎薩克大喇嘛として指名した。その次の化身者であるロールベドルジェ (lcang skya rol pa'i rdo rje: 1717-1786) は7歳の時、北京に行き、乾隆帝とともに育てられたという。のちに乾隆帝は彼を師僧として崇め、北京にチベット仏教の僧院—雍和宮を建立し、チャンキヤ・ホトクト3世が雍和宮の主になった^⑫。

これ以降のチャンキヤ・ホトクトは、清朝より北京の雍和宮を始めとする多くの寺院の管理を命じられ、冬期は北京に、夏期は承德や内モンゴルのドロンノールに居住した。内モンゴルの多くの化身ラマたちは、歴代チャンキヤ・ホトクトにより認定され、その後、理藩院に報告された。

当時、大きな僧院には、主たる化身ラマ(ホトクト、ゲゲン)の他に、何人かの化身ラマ(ホビルガン、シャブラン)の邸を置くのが普通であった。光緒6年(1900年)には、理藩院によって正式に登録され承認されたモンゴルの大ラマ(ホトクト、ゲゲン)は243名おり、そのうち、内モンゴルには157名がいたとされる(徳勒格1998: 305、Heissig 1980: 1)。

モンゴル人の化身ラマについては、地方に居住する化身ラマに対する研究はあまり進んでいない。しかし当時、モンゴルは盟旗に分けられ、各盟旗の貴族、王侯たちは絶対的な力を持ち、また、彼らの家族と寺院の高位ラマ僧との関係は密接なものであった。

4. ベイスイン・スム・ジャンルン・パンディタの系統

ベイスイン・スムでは8人の化身ラマ(ゲゲン)が認定されてきた。最初と最後の化身ラマがチベッ

ト人である以外、他はモンゴル人である。

ベイスイン・スムで即位された化身ラマを具体的に見てみると次のようになっている。

1世: バルジュルンドブ (dpal 'byor lhun grub: 1709-1768)

2世: ナワンロサンダンビギヤツァン (ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan: 1770-1845)

3世: ロサンダンビチュルトム (blo bzang bstan pa'i tshul khriims: 1846-1872)

4世: ロサンゲンデンダンズンジャムツォ (blo bzang dge 'dun bstan 'dzin rgya mtsho: 1872-1886)

5世: ロサンカイドブプレンレイラプジェ (blo bzang mkhas sgrub 'phrin las rab rgyas: 1888-1918)

6世: ロサントブデンゲリグニマ (blo bzang thub bstan dge legs nyi ma: 1919-1922)

7世: ナワンロサンバレデンチョインジン (ngag dbang blo bzang bpal ldan: 1923-1946)

8世: ダンズンプレンレルンドブ (bstan 'dzin 'phrin las lhun grub: 1954-2010)

初代のゲゲン・バルジュルンドブはアムド地方の出身者で、1709年に生まれた。彼は12歳の頃に故郷を離れ、シリンゴル・スニト右旗の王チョイジャブの家に滞在し、布教を始めた。彼は1768年に遷化した。

2世は、1770年にシリンゴル盟スニト左旗のタイジ・ドンロブの家に生まれ、1775年チャンキヤ・ホトクト3世により、ジャンルン・パンディタの化身者として認定された。6歳の時、ベイスイン・スムで即位した。

3世は、1846年にシリンゴル盟アバガ左旗タイジの家で生まれ、ダライ・ラマにより認定され、6歳の時にベイスイン・スムで即位した。16歳の時、ラサに赴き、ダライ・ラマやパンチェン・ラマから加持を受け、セラ寺で勉強していた。また、ベイスイン・スムでツォンカバと緑度母の像を鑄造し、新しいラプラン堂を建てた。1871年に遷化した

4世は、1872年にシリンゴル盟ホチト左旗タイジの家で生まれ、パンチェン・ラマにより認定され、6歳の時、ベイスイン・スムで即位した。1886年に遷化した

5世は、1888年にアバハナル右旗タイジの家で生まれ、ダライ・ラマにより認定され、6歳の時、

ベイスイン・スムで即位した。11歳の時、五台山に行き、修行を積んだ。16歳の時、ラサに赴き、セラ寺で勉強していた。3年後故郷に戻ってきて、ベイスイン・スムでギューメー学堂を創建した。21歳の時、北京にゆき、ダライ・ラマに謁見し、加持を受けた。24歳の時、イフ・フレヘへゆき、そこで、宗教活動に参加した。25歳の時、ベイスイン・スムでマンバ学堂を修繕した。1918年に遷化した。

6世は、1919年にアバガ右旗タイジの家で生まれた。ダライ・ラマにより認定され、4歳の時にベイスイン・スムで即位した。1922年に遷化した。

7世は、1923年にアバガ左旗タイジの家で誕生し、パンチェン・ラマにより認定された。1928年、パンチェン・ラマ9世がベイスイン・スムに来た際、正式に即位した。18歳の時、北京、上海を経由して、船でインドに赴き、さらにラサへ行き、そこで学んだ。1946年に遷化した。

8世は、1955年にチベット・ラサ市郊外に生まれ、1957年のとき、ダライ・ラマにより認定された。3歳の時、ラサで即位した。ベイスイン・スムからは3人のラマ僧が付き添い役としてラサへ派遣された。文革大革命が終わった後、1980年にセラ寺で勉強し始めた。1984年、チベット自治区政協委員など要職に当たった。1986年、初めてベイスイン・スムにきて、3ヶ月滞在した。8世は2010年に遷化した(シリン浩特市文史資料室1990: 23-25, 52-53)。

以上のように、ベイスイン・スムには8人の化身ラマがいた。その内、モンゴル人の化身ラマたちは、地方の王侯の家族に生まれ、ダライ・ラマやパンチェン・ラマ、またはチャンキャ・ホトクトにより認定されてきた。実際、2世はソニト左旗タイジ、3世はアバガ左旗タイジ、4世はホチト左旗タイジ、5世はアバハナル右旗タイジ、6世はアバガ右旗タイジ、7世はアバガ左旗タイジの家に生まれた。化身ラマと地方の有力者の間に緊密な関係があったのである。

また、以上の化身ラマたちの出身家庭を見ると、スニト左旗、アバガ左旗、ホチト左旗、アバハナル右旗、アバガ右旗、アバガ左旗のタイジの家族という具合に、各旗に順番に生まれてきたことがわかる。すでに明らかにされているように、チベット仏教の高位化身ラマたちと清朝、モンゴルの王侯、貴族や有力者との間に結ばれた互恵的關係は、地方においても、同じ形で存続してきた。ベイスイン・ス

ムのような僧院の存在と、化身ラマの出現により、地方の各旗、部族の間の関係はより緊密となることのできた。一方、地方の王侯、貴族たちからの庇護、布施がなければ、草原の中に建てられた僧院の維持は困難であった。

5. ジャンルン・パンディタ2世の生涯

歴代ジャンルン・パンディタの中で最も名声を有するのは、2世のナワンロサンダンビギヤザンである。彼は、ベイスイン・スムの規模を拡充し、生涯をかけてモンゴル高原を布教して回った人物である。彼が著したチベット語の著作(gsung 'bum)は7函、126編に及び、現在までチベットとモンゴル地域に収蔵されている。

ジャンルン・パンディタ2世の生涯について、かつてM・Qoos、Nacinsongqor、M・S・Öljei、Lobsang、ÜrüntuyaG_aなどの研究者が紹介したことがある。また、彼の弟子であるロサンチンライナムギャ(blo bsang 'phrin las rnam rgyal)が19世紀初頭に著した「rje btsun dpal ldan bla ma dam pa lchang lung arya pandi ta rin po che ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa mkhas pa'i yid 'phrog nor bu'i do shal zhes bya ba bzhugs so」というチベット語のナムタルがある。本稿では、先行研究を踏まえながら、ナムタルに基づいて、ジャンルン・パンディタ2世の生涯について概観することにより、18世紀末—19世紀初頭のモンゴル地域に生きた化身ラマについて検討したい。

一般に化身ラマたちは、神秘的な力(ridi, shidi)を持つ者と信じられるが、一旦、ある化身ラマの転生者として認可されると、幼い時から実家から離され、専門的な教師の下、厳格な教育を受けなければならない。

ジャンルン・パンディタ2世は熱心な布教者であると同時に、優れた学者としてみなされてきた。以下はジャンルン・パンディタの人生について、1800年頃を境に前半生と後半生に分けて検討する。

勉強と修行の前半生

ジャンルン・パンディタ・ナワンロサンダンビギヤザン(lchang lung pandi ta ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan)は1770年旧暦2月1日シリンゴル盟スニト左旗のタイジ・ドンロブの

表1

年月	主な活動	年月	主な活動
1771	一歳の時、父親に連れて、ドロノールに行き、チャンキヤ・ホトクト・ロールペードルジェに謁見した。	1792	ダライ・ラマ8世からパンディタ称号を与えられた。
1775	チャンキヤ・ホトクトによりジャンルン・パンディタ2世と認定された。	1795	2月に北京へゆき、アジャ・ゲゲンのもとに勤学した。
1776	6月モラム大会に信徒と弟子たちに向かいユロール(祝詞)を語った。	1796	11月に北京へゆき、嵩祝寺でジャサク・ラマ・ゲリクナムハイから加持を受け、修行した。帰る途中、ドロノールのノヤン・チョルジのもとに指導を受けた。
1780	4月にドロノールに行き、チャンキヤ・ホトクトに拝謁した。また6月にパンチェン・ラマ6世に謁見した。	1797	1月にベイスイン・スムに戻ってきた。また10月に清朝皇帝の長寿を祈願する儀礼に参加するため、北京へ赴いた。
1783	8月に五台山に行き、チャンキヤ・ホトクトに拝謁した。	1798	北京から故郷に帰る途中、五台山に行き、各寺院に布施した。
1785	6月にミンジル・ノモンハンにベイスイン・スムに招いて、説法を求めた。11月に北京行き、チャンキヤ・ホトクトに拝謁した。	1803	東チベットクンブム寺、ラブラン寺を訪ね、グンタン・ゲゲンなどの高僧から加持を受け、学習した。
1790	チベットに留学ため、3月5日に出発し、5月に東チベットクンブム寺を経て、8月にラサに到着した。9月にダライ・ラマ8世に謁見し、セラ寺に滞在し、勉強し始めた。	1804	東チベットのチュブサン寺に行き、チュブサン・ホトクトの下に勉強した。
1791	ダライ・ラマ8世からゲロン戒を受けた。		

家に生まれた。1771年父親に連れて、ドロノールの寺院へ赴き、チャンキヤ・ホトクトから加持を受けた。1775年チャンキヤ・ホトクト3世により、ジャンルン・パンディタの化身者として認定され、ベイスイン・スムに迎えられ、即位した。モンゴルの高僧ダイ・グーシ・ナワンデンベルなどの指導のもと、チベット語と仏教学の基礎を学んで、イフ・カンブ・ドルジチャン・ノモンハンから具足戒を受けた。

しかし、ジャンルン・パンディタ2世はベイスイン・スムでの勉強に飽き足らず、チベットとモンゴルの高僧たちの下にゆき、学問に精進する道を選んだ。以下、彼の求法時期として1780年から1804年までの事績をナムタルに基づいて表1に示した。

表1からジャンルン・パンディタ2世の1771年から1804年までの活動をみると、彼は24年間、色々な高僧のもとにゆき、研鑽を重ねたことが明らかである。その中で、第一に、内モンゴル仏教界の頂点とされたチャンキヤ・ホトクト3世を師として学んだこと。第二に、中央チベットのラサに行き、ダライ・ラマから称号を与えられたこと。第三に、東チベットのアムド地方に赴いたことを、他の史資料との関連の上で見てみよう。

第一の、チャンキヤ・ホトクト・ロールペードルジェに3回謁見したことについては、ジャンルン・パンディタのナムタルによると、ジャンルン・パンディタはチャンキヤ・ホトクトに1780年にドロノール、1785年に五台山、1785年に北京で3回謁見し、仏教を学び、密教の灌頂を伝授されたという。

1780年の最初の謁見については、1780年パンチェン・ラマがチベットから北京に赴いたとき、チャンキヤ・ホトクトが奉迎のため、青海まで行ったことが記されている。また、『8世パンチェン・ラマのナムタル』では、「乾隆帝45年(1780)の3月10日、パンチェン・ラマ6世がクンブム寺から寧夏、内モンゴル・イフ・ジョ盟、チャハル盟を経て、承德へ行き……6月1日に内モンゴル・オトク旗に着き……7月21日に承德に到着した」とある(牙含章2000: 138-139)。

1783年の謁見については、『チャンキヤ・ホトクト・ロールペードルジェのナムタル』では、「アバガ旗・ジャンルン・パンディタの希望に応じて、ロサンドルジェ、シャブラン・ゴンチュガダシ、ダイ・グーシ・ゲゲンなど約200人の僧侶に13尊ヤマタカの4種類の灌頂を伝授した」と記されている(洛桑却吉尼玛2007:287)。

1785年の謁見については、『チャンキヤ・ホトクト・ロールベードルジェのナムタル』には、ジャンルン・パンディタに関する記録がない。しかし、1786年はチャンキヤ・ホトクトの70歳の誕生日であったため、1785年の冬にチベットやモンゴルの多くの高僧たちがチャンキヤ・ホトクトに謁見するため北京に行ったことが書かれている。ここから、ジャンルン・パンディタも謁見に行った可能性は高いと思われる。

チャンキヤ・ホトクトは内モンゴルの仏教界の第一位の高僧である同時に、清朝皇帝の教師として尊敬されていた人物である。彼との関係は名誉に関わることであるため、ジャンルン・パンディタのナムタルに、チャンキヤ・ホトクトの名が度々登場してくることも理解できる。

第二に、中央チベットでの勉強については、表1に記したように、1790年の3月にシリングル盟から出発し、9月にラサに到着した。1791年ゲロン戒(具足戒)を受け、1792年にダライ・ラマ8世からパンディタの称号を授けられたという。

ただ、今までの研究ではジャンルン・パンディタのパンディタの称号に関して、誰から(ダライ・ラマかパンチェン・ラマか)、いつもらったのかなどの問題について、結論が一致していない。しかし『ダライ・ラマ8世のナムタル』に「(1792年)3月10日……ジャンルン・パンディタに称号、印鑑、タルチャク、鞍……を与えた」と記録されているため、ダライ・ラマ8世から与えられたという、ジャンルン・パンディタの伝記の信頼度は高いと考える(ngag dbang blo bzang thub bstan 'jigs med rgya mtsho 2019: 190)。

第三に、東チベット・アムドでの修行、弘教については、1790年、ジャンルン・パンディタが初めてラサに行く途中で、東チベットのクンプム寺(sku 'bum byams pa gling)に5月から6月まで滞在し、布施して、高僧たちから密教を伝授したとある。その後、1803年から1804年まで、再びアムド地方に赴き、研鑽を重ねた。これについては、ラブラン寺の『グンタン・リンポチェ3世のナムタル』の中では「年齢43歳の甲子年の正月、北方から来た太陽のごとき ジャンルン・パンディタに灌頂、祈願などの伝授を行い…」とある(dkon mchog rgyal mtshan 1986: 193)。グンタン・リンポチェ3世は1762年の生まれたため、ジャンルン・パンディ

タのナムタルの記述とも時間的に符合する。

まとめると、ジャンルン・パンディタは6歳で僧門の誓いを立てて以降、35歳まではドロノール、五台山、北京、ラサ、アムドなどの仏教の中心地に行き、高僧たちに教えを請い、修行を続けていた。彼の弟子が書いたナムタルを他の史資料と比較することにより、このナムタルの記述の信頼性が高いということが改めて示された。

布教の後半生

ジャンルン・パンディタ2世は、優れた学者として評価されてきた。彼は仏教に関する著作以外、寺院の歴史、規則、医学、天文、祝詞、呪文、文法などについて多くの著作を残した。また、ベイスイン・スムを拡張し、弟子たちに仏教の教え、祈願文、灌頂の伝授を行い、多くの弟子を育成したため、彼の即位していた時期に、ベイスイン・スムは極めて栄えた。表2は、ジャンルン・パンディタ2世の1797年から1845年までの、巡錫、布教活動を示しているものである。

表2からわかるように、ジャンルン・パンディタ2世は、ほぼ毎年各地を巡っていた。北京や五台山、ドロノール、ハルハなどの地方に行く途中では、各寺院に布施を献じ、僧俗たちの要請に応じて灌頂と多くの説法をした。以下はジャンルン・パンディタの北京、ドロノール、ハルハ、内モンゴル東部と五台山、また療養のために訪れていた温泉地での活動を、他の史料と対照しながら検討したい。

(北京)

ジャンルン・パンディタは1797年以降、北京に12回赴いた。その中の6回(1797年、1804年、1812年、1816年、1819年、1820年)は清朝の嘉慶帝のテンシユク(brtan bzhugs)、すなわち、清朝皇帝の長寿を祈願するための正月2日の儀礼に参加するために北京へ赴いた。嘉慶帝が1820年になくなった後は、正月のテンシユクに行った情報はない。これはまた、清朝後期になると、仏教に対する清朝の優遇策が変化したことを示している。

また、チャンキヤ・ホトクト4世に会うため、2回(1807年、1814年)北京に行った。前述のように、ジャンルン・パンディタはチャンキヤ・ホトクト3世により認定され、密教の灌頂などを伝授された。その縁はチャンキヤ・ホトクト4世との関係として

表2

年月	主な活動	年月	主な活動
1797	10月に清朝皇帝のテンシュク儀礼に参加するため、北京へ赴いた。	1826	3月に五台山へ行き、途中ではチャハル盟の各旗の各僧院に訪問し、僧侶や俗人にそれぞれの灌頂を受け、普く結縁した。また、チャンキャ・ホトクト40歳のお祝いにドロンノールを訪問し、長寿を祈願する偈と献上品を合わせて贈った。
1802	7月にハルハ・グンサンバルバラ・王の招聘を受け、イフ・フレーを初訪問した。帰途布教しながら9月にシリングルに戻ってきた。	1827	3月23日、ジェブツンダンバ・ホトクトに会うため、ハルハへ行き、5月10日、イフ・フレーに到着した。そこで宗教活動に参加し、帰途、ダリガンガの地域で布教した。
1804	カラチン地方にゆき布教し、帰る途中、熱河に行った。冬に北京に行った。翌年に、清朝の皇帝であった嘉慶から「延福寺」に扁額を贈った。	1828	3月、ケシケテンの温泉に行き、7日間滞在した。またドロンノールにも行った。
1806	チャハル・グンの王姫の食中毒を治療した。	1829	2月、タンシヤンの温泉に行き、18日間滞在した。
1807	北京にゆき、チャンキャ・ホトクト4世に拝謁した。	1830	3月、ケシケテンの温泉に行き、21日間滞在した。
1808	ドロンノールで、ジェブツンダンバ・ホトクト4世に拝謁した。	1831	7月にドロンノールに行き、チャンキャ・ホトクトに会った。8月5日、ケシケテンの温泉に行き、21日間滞在した。
1810	10月に北京に行って、各寺院に巡礼し、布施した。	1832	ダライ・ラマ、パンチェン・ラマ、グンタン・リンポチェ、ミンドル・ゲゲン、チャンキャ・ホトクト、ジェブツンダンバ・ホトクトなどに布施を授けた。
1811	ジェブツンダンバ・ホトクトの招聘を受け、ハルカにゆき、途中布教しながら、イフ・フレーに一ヶ月滞在し、宗教活動に参加した。	1833	8月15日、ケシケテンの温泉に行った。また、オールドス、コルチン、ハルカからきたラマ僧たちに無上ヨーガタントラの灌頂などをさせた。
1812	11月に北京に行って、各寺院に巡礼し、布施した。	1835	2月にチャンキャ・ホトクトに会った。4月に多くの僧俗がオールドスから到着し、彼らの段階に応じて、マンガラの言葉など法の祈願をさせた。6月7日に温泉に行き、7日間滞在した。ホルチンからきたラマ僧たちに医学の教えをさせた。
1813	2月に北京から戻ってきて、6月にハルカの温泉に行った。	1836	7月、ケシケテンの温泉に行った。翌年4月にも行った。
1814	11月に嘉慶帝のテンシュクにゆき、北京でチャンキャと会った。	1839	2月9日温泉に行くとき、ドロンノールで5日滞在した。チャンキャ・ホトクトから、二世の70歳のお祝いのもをもらった。
1815	チャンキャ・ホトクト4世をベイスイン・スムに招聘した。7月に温泉に行った。10月に嘉慶の招聘書もらったが、2世が体調良くない為、断った。代わりに、シリングル盟の各地域に行って仏法を宣揚した。	1840	6月15日からハナ温泉に行き、21日間滞在した。4月3日チャンキャ・ホトクトへ書信を送り、ベイスイン・スムに招いた。それに応じて、チャンキャが6月13日に到着した。
1816	11月に嘉慶帝のテンシュクにゆき、またチャンキャ・ホトクト4世に拝謁した。	1842	7月、ケシケテンの温泉に行った。
1817	北京の近くの主要な仏教聖地を巡礼し、唐山の温泉に10日間滞在した。その後、故郷へ帰った。	1843	ハルカ・ホリチャビリゲト・グーシの申請に応じて、彼が書いた詩を添削した。7月7日チャンキャ・ホトクトがアバガ旗王の宮殿に行き時、ベイスイン・スムに滞在した。
1818	5月にドロンノールに行き、8月に北京に行った。	1844	5月15日ドロンノールに行き、チャンキャ・ホトクトに500両銀、100匹馬を贈った。10月、オールドス盟、ウラド旗などの地方からきたゲゲン、ホビリガンたちに医学経典を教えた。
1824	6月、チャンキャがドロンノールに行き際、会った。8月、チャンキャがウジムチンから戻っていくとき、もう一度会った。	1845	3月にハルカ・ジノン・ベイスの家族、親戚などにマンガラの言葉など法の祈願をさせた。4月16日に温泉に行き14日間滞在した。5月19日に円寂した。
1825	6月、ハナ温泉にゆき、11月、北京に行き、帰るときまたドロンノールに行った。		

も継続している。チャンキャ・ホトクト4世(1787-1846)がチベットに留学して、ゲロンの戒を受けた後、1807年に北京に戻ってきた際、ジャンルン・パンディタが謁見に行ったという記録もある。

当時チャンキャ・ホトクト3世は北京のチベット仏教界の頂とみなされ、内モンゴルの仏教界の最高位を占めていた人物であった。彼の化身者である4世とも、ジャンルン・パンディタは師と弟子の縁を継続させるために会ったと思われる。

それ以外の3回(1817年、1818年、1825年)では、北京のチベット仏教寺院を巡礼し、布施をおこなった。

(ドロンノール)

ジャンルン・パンディタは1797年以降、ドロンノールに8回赴いた。当時、ドロンノールには、清朝の康熙帝により建てられた彙宗寺と善因寺という二つの大きな僧院があり、チャンキャ・ホトクトを初めとする十数人の高位化身ラマの邸があって、内モンゴルの仏教の中心地とされていた。ジャンルン・パンディタは1808年に、ジェプツンダンバ・ホトクト4世がドロンノールに来た際、拝謁するためにドロンノールへ行った。そこで、ジェプツンダンバ・ホトクトからイフ・フレーに来よう誘われた。その他、チャンキャ・ホトクト4世に拝謁するために4回(1819年、1826年、1831年、1844年)赴いた。また、北京や温泉などを往来するときにも4回(1817年、1818年、1820年、1825年)ドロンノールに滞在した。

(ハルハ)

ジャンルン・パンディタは1797年以降、ハルハに3回赴いた。1802年には、ハルハ・ゲンサンバルバラ王の招聘を受け、7月にイフ・フレーを初めて訪問した。旱魃などの自然災害が三年続いていたが、ジャンルン・パンディタの来訪によって改善されたという。9月に故郷へ帰った。

1811年には、ジェプツンダンバ・ホトクト4世の招待を受け、3月23日に出発し、5月10日にイフ・フレーに着いた。1827年に、ジャンルン・パンディタは再びジェプツンダンバ・ホトクトに拝謁するためハルハに赴いた。そこで、ジェプツンダンバ・ホトクトに迎えられ、銀の曼陀羅、銀の仏像、金字無量寿経などを与えられた。ジャンルン・パン

ディタはイフ・フレーにおける宗教活動に参加しただけでなく、シリングルへ帰る時、ダリガンガ地方で布教した。

ジャンルン・パンディタ自身がハルハの地域に行き、布教したのみではなく、ハルハの王侯、ラマ僧たちも、ベイスイン・スムにきて、灌頂などを要請したという多くの記録がある。たとえば1810年、ジャンルン・パンディタは、ハルハの僧侶たちに医学の経典についての教えを説いた。1833年にはハルハ・チンワン旗のロブサンイェシ・ゲルンなどの僧侶の要請に応じて、灌頂・瞑想法の伝授を行った。1843年には、ハルハ・ホリチャピリゲト・グーシの申請に応じて、彼が書いた詩を添削し、1845年の3月にはハルハ・ジノン・ベイスの子供、兄、などに密教の祈願をさせた、などの記録がある。ベイスイン・スムでは、ハルハ或はダリガンガなどの出身の弟子が、全僧数の半分にも及んだ。

(内モンゴルの東部と五台山)

ジャンルン・パンディタが、内モンゴルの東部に行った記録は少ない。1804年にハラチン地方に布教して、帰る途中熱河の寺院に布施したことと、1823年にホルチン王の宮殿で3日間儀礼を行なったという二つの情報しかない。しかし、ホルチン・ジャサクト・ワンの大ラマ、トワラマ、ハラチンのゴマン・ダツァンのホビリガン・ロブサンバルダンズンニマを初めとする東部地域からきたラマ僧たちに教えを伝授していた記録は幾つかある。また、五台山については1783年チャンキャ・ホトクトから13尊ヤマンタカの4種類の灌頂を授かるため行ったという記録と、1826年の3月10日五台山にゆき、各寺に布施し、黛螺頂で7日間修行したという記録がある。五台山へ往来する途中、チャハル盟の各旗のラマ僧、信徒たちからの要請で説法を行ったという。

(温泉へ)

ジャンルン・パンディタのナムタルに関するもう一つの面白い記録は、1813年にハルハの温泉に行ってから1845年までの15年間、毎年温泉地を訪れたことである。特に1828年から1831年までの4年間と、1840年から1843年までの4年間は、毎年ケシケテン旗や、さらに遠い唐山の温泉に行ったことが記されている。ジャンルン・パンディタの健康に関

して、1815年に皇帝の新年の長寿祈願会に参加を求め、要請が届いたが、身体の調子がよくないため、休暇を求めたという記録がある。その年も、温泉に行ったという記録が残されている。

しかし、ジャンルン・パンディタのナムタルを読むと、温泉に行く道中も、温泉地での滞在期間中も熱心に説法していたことがわかる。例えば、1831年に、ケシケテンの温泉地に21日間滞在した時、ウジムチン旗、アバガ旗からきた多くの人々に説法し、普く結縁したなどの記録が残されている。広い草原で、年に何度も移動して暮らしをたてる牧民たちにとって、温泉は数少ない人々の集まる場所であったため、そこで説法を行うことは、布教のための良い機会となった。また、ジャンルン・パンディタは医薬に精通していたため、温泉にきた牧民の病気を治療し、人々を苦しみの闇から救ったことも記されている。

ジャンルン・パンディタ2世は5歳の時、チャンキャ・ホトクト3世によりジャンルン・パンディタの化身者として認定され、最初は高僧ダイ・グーシ・ナワンデンベルなどの指導のもと、チベット語と仏教学の基礎を学んだ。20歳の時中央チベットのセラ寺に留学し、その後ダライ・ラマ8世からパンディタの称号を与えられた。また、東チベットのグンタン・リンポチェ、チュサン・リンポチェなどの高僧を師として仏教の講義や、灌頂などを受け、縁を結んだ。

彼は、1795年から1820年までの間、清朝皇帝の長寿を祈願するため行う正月のテンシユクに6回参加した。その上、清朝皇帝の権威の代表とみなされるチャンキャ・ホトクト3世と4世とは親しい関係を保っていた。

また、ジャンルン・パンディタ2世はハルハ・モンゴルからの招聘を受け、3回にわたって外モンゴルの地域にゆき、説法した。そのうち一回はハルハ・グンサンバルバラ王の招聘を受け、それ以外の2回はジェブツンダンバ・ホトクトの招聘を受けて、イフ・フレーにおける宗教活動に参加したという。

このように、ジャンルン・パンディタはほぼ毎年各地にでかけ、布教したが、1822年、1834年、1841年はベイスイン・スムに閉じこもって修行したという。その間は、寺院の改築や仏像をつくるこ

とに努めながら、多くの著作を著し、儀礼をおこなひながら、僧侶たちには戒律の厳格な遵守を求め、仏教哲学の講義を行い、授戒した。

6. 終わりに

本稿は、ジャンルン・パンディタ2世の弟子が著したチベット語のナムタルに基づいて、18世紀末から19世紀初頭を生きたモンゴル人の化身ラマが、モンゴルと清朝の間でどのような役割を果たしていたのかについて検討した。

シリングル盟において、ジャンルン・パンディタは寺院の最高位の権威者である同時に、歴代化身者は各旗の王侯家族から選ばれ、各旗を団結させる役を果たしていた。また、ジャンルン・パンディタ2世はローカルな化身ラマであるが、モンゴルの各盟旗、チベットと清朝を含む、各勢力との関係づくりに深く関わっていて、地域では欠かせない存在であったともいえる。

化身ラマというと、生まれながらに神秘な力を持つ者として思われるが、チベット仏教では化身ラマの教育を極めて重視する伝統がある。その伝統に従って、ジャンルン・パンディタ2世は小さい頃から厳格なチベット仏教教育を受け、34歳までは各地域の高僧の下に赴き、仏教の勉強、修行に専念した。故郷へ戻ってきたあとは、内モンゴルの中部にあるシリングル盟を中心にし、北京、五台山、アムド、ラサ、モンゴルの各盟旗に赴き、布施や説法をし、著作を執筆しベイスイン・スムの拡大に努めた。療養のために訪れた温泉地も布教する場所として利用していた。

ダライ・ラマ、パンチェン・ラマ、チャンキャ・ホトクトなどと比較すると、ジャンルン・パンディタは地位や影響力などが小さい化身ラマである。しかし、チベット・モンゴル仏教世界には多くの化身ラマたちが存在し、彼らの背景、認定過程、権利、影響力も様々であった。ジャンルン・パンディタのようなローカルな化身ラマの役割について検討することは、チベット・モンゴル世界を理解するための重要な鍵となるのである。

注

- ① 当時、ホン・タイジは元朝伝来のマハーカーラ像を奉戴していたという。そのマハーカーラ(サンスクリット語: Mahākāla、チベット語: Nagpo Chenpo、モンゴルでは両方を使う)は、フビライ・ハーン伝来の玉璽とともに、モンゴル皇帝の政教権の象徴といわれる。チャハルのリグダン・ハーンが1634年に病没した後、それらを獲得することによって、ホン・タイジはモンゴル帝国の正統的な継承者とされた。マハーカーラは13世紀から、モンゴルを守り、敵を倒す強力な守護神として崇拜されてきた。
- ② ベイスイン・スム(貝子廟)の「ベイス(貝子)」は、beiseという満語であり、清朝における爵位の四番目である。アバハナル旗に有名なベイスがいくつかいたため、この寺院はベイスのスム(廟)とも呼ばれてきたという。本稿ではベイスイン・スムというモンゴル語の読み方を採用する。
- ③ オボは、モンゴルの草原・山頂・峠・湖や泉の岸辺に、祭祀の目的で、石または木で作られた聖所である。エルデニ・オボは毎年陰暦の5月13日に祭祀を行う。
- ④ モンゴル語の読み方: ariy-a janglung bandida gegen keid
- ⑤ これ以外、ベイスイン・スムではダイ・ラマハイ、ホトクト・ラマハイ、ロブン・ラマハイ、エリエト・ラマハイという四つの化身ラマの系統があって、彼らのことをホビルガン・ラマハイと呼ぶ。(Ürnigüüd・S・Engke 2011: 178)
- ⑥ ナムタルとはチベットとモンゴル語で、伝記という意味をもつ。チベット語では、rnam thar と、モンゴル語では namtar と書く。
- ⑦ バクシはモンゴル語で、師の意味をもつ。カルマ・バクシはカルマ派の師という意味である。
- ⑧ カルマ・バクシ・チョーキ・ラマはカルマ・トゥースムケンバの没年後の11年後に誕生しているが、彼がカルマ派を隆盛に導き、さらに、モンゴルのハーンから称号を与えられた。カルマパ・ランジュンドルジェ3世がはじめてから転生者とみなされていたかどうかことに疑問を呈している研究者もいる。しかし、二人ともすぐれたカリスマ性を持つラマ僧で、布教、建寺とよな宗教活動だけでなく、地域紛争の調停者としても有名であった。そのため、カルマパの転生系統は最古の名跡になった。
- ⑨ ソナムギャムツォは前世として二人の転生ラマを数え、ダライ・ラマ3世と称されるのが通例である。「ダライ」はモンゴル語で「大海」を意味し、「ラマ」はチベット語で「上人、師僧」の意味である。
- ⑩ ダライ・ラマ四世は1602年に初めてラサの地を踏み、正式に法王位に即いた。しかし、わずか14年後、1616年デブン寺で遷化した。(ngag dbang blo bzang rgya mtsho 1652)
- ⑪ 1650年代半ばまで、チベットのガンデン・ポタンの政治権力の真の担い手はゲーシ・ハーンであったとされる。ゲーシ・ハーンと彼の任命した摂政(デシー: sde srid)が相次いで亡くなって以降、ダライ・ラマ五世が権力を自らに集中させたという。(Schwieger, Peter 2015. 池尻陽子: 2021)
- ⑫ ジェブツンダンバ・ホトクトがゲルク派の転生者として認定されなかったことについて、(宮脇淳子 1993)(石濱裕美子 1995)(金成修 2003)(新藤篤史 2014)などの研究が挙げられる。
- ⑬ 彼は現在の青海省互助土族自治县にあるグンロン寺(dgon lung byams pa gling)の座主であった。
- ⑭ 1723年に、ダライ・ラマ6世の転生者をめぐる清朝とホシヨト王侯の間で起った戦争では、清朝によってアムド地域の多くの僧院が破壊された。当時7歳であったチャンキャ3世は北京に送られた。チャンキャ3世はカンギュルをはじめとする数多くのチベット語の経典のモンゴル語や満洲語への翻訳を行い、多くの寺院を建てた。

参考文献

チベット語文献

- dkon mchog rgyal mtshan.1986 『dpal mang pandi ta tas mdzd: gung thang bstan pa'i sgron me'i rnam thar』kan su'u mi rigs dpe skrun khang『グンタン・リンポチェ3世のナムタル』
- ngag dbang blo bzang rgya mtsho.1652 'bras sponges 『jig rten dbang phyungs thams cad mkhyen pa yon tan rgya mtsho' i rnam par thar pa nor bu'i 'phreng ba』『ダライ・ラマ4世のナムタル』
- ngag dbang blo bzang thub bstan 'jigs med rgya mtsho 2010 『rgyal dbang sku phreng brgyad pa blo bzang bstan pa'i dbang phyung 'jam dpal rgya mtsho'i rnam thar』krung go'i rig pa'i dpe skrun khang 『ダライ・ラマ8世のナムタル』

blo bsang 'phrin las rnam rgyal [rje btsun dpal ldan bla ma dam pa lchang lung arya pandi ta rin po che ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar pa mkhas pa'i yid 'phrog nor bu'i do shal zhes bya ba bzhugs so] 『ジャンルン・パンディタ2世のナムタル』

モンゴル語文献

Ürnigüüd・S・Engke, 2011 『ariy-a janglung bandida gegen keid-ün teüke』 『アリヤ・ジャンルン・パンディタ・ゲゲン寺の歴史』, Öbür monyol-un šhinjilekü uqaγan te'gnig mergejil-ün qoriy_a

M・qoos, Nacinsongqor 1991 「lchang lung bandida ngag dbang blo bzang bstan pa'i rgyal mtshan-u tuqai ügülekü ni」 「ジャンルン・パンディタ・ナワンロサンダンビギヤザンについて」 Öbür monyol-un baγsi-yin yeke surγayuli-yin erdem sinjilegen-ün sedkül

M・S・Öljei 1996 『monyolcuud-un töbed-iyer tuyurbiγsan uran jokiyal-un sudulul』 Öbür monyol-un ündüsüten-u keblel-ün qoriy_a 『モンゴル族チベット語文学研究』

Lobsang、Ürüntuyay_a 1998 『töbed nom-iyer geigegsen monyol erdemted』 Öbür monyol-un arad-un keblel-ün qoriy_a 『チベット語で著するモンゴル人の学者たち』

シリシホト市文史資料室 1990 『sili-yin xota-yin soyol teüken matèriyal (nigedüger emkidkel)』 『シリシホト市文史資料』 (内部資料)

中国語文献

德勒格 1998 『内モンゴル喇嘛教史』 内モンゴル人民出版社

洛桑却吉尼玛著 陈庆英译 2007 『章嘉国师若必多吉传』 中国藏学出版社

金修成 (韩) 2006 『明清之际藏传佛教在蒙古地区的传播』 社会科学文献出版社

牙含章 2000 『班禅额尔德尼传』 北京华文出版社

英語文献

Bulag, Uradyn E 2010. *Collaborative Nationalism: The Politics of Friendship on China's Mongolian*

Frontier. Rowman & Littlefield.

Heissig, Walther 1980. *The Religions of Mongolia*. Berkeley: University of California Press.

Schwieger, Peter. 2015. *The Dalai Lama and the Emperor of China: A Political History of the Tibetan Institution of Reincarnation*. New York: Columbia University Press.

日本語文献

石濱裕美子 2001 『チベット仏教世界の歴史的研究』 東方書店

池尻陽子 2021 「ダライ・ラマ政権成立前後のチベットと東方ユーラシア」 岩尾一史・池田巧編 『チベットの歴史と社会・上』 臨川書店

新藤篤史 2014 「ジェブツンダンパの「転生」認定 17世紀のチベット・モンゴル関係」 『大正大学大学院研究論集』 38: 400-418頁

長尾雅人 1992 『蒙古学問寺』 中央公論社

宮脇淳子 1993 「ジェブツンダンパー一世伝説の成立——十七世紀ハルハ・モンゴルの清朝帰属に関連して——」 『東洋学報』 74巻3・4号